

聞、善左衛門へも申遣候由に候。明の李時珍が本草綱目人傀の條下に、古今の異産種々の事記載有之儀存付、考看候處如此に似寄申事も無之候。孕婦の變のみにあらず、其婦人土藏の二階に存在仕候事も、亦一奇恠に候。此事に似申儀は、脇田夕庵・藤田意樂等の老人の話と頗る似申事有之に付、左に記之。

陽廣公の御代今の二丸御殿にて、或る時夜中御衣裳に御用有之、可差上旨御意に候處、預りの御奉行共は下宿し不有合候。其夜宿直の頭脇田九兵衛、七兵衛祖父御横目千秋太郎左衛門へ申談し御納戸へ遣之、御衣裳の篋箆鎖を啓き引出しを出し候處、十二歳許の女子飛出で、太左衛門に懐き付候。其邊に有合候もの甚駭き候。太郎左衛門其女子を懐き留め放ち不申、御用の御衣裳は人に取出させ上之候て、女子は御次へ懐き罷越頭共へもみせ、何方より罷越候哉相尋ね候處に、越中高岡小馬出邊に住居仕候紺屋の女に候。今晝何もの共不知つれ罷越候旨申候。仍之早飛脚を以て高岡へ尋ねに遣候處、右紺屋は金澤の方へ女子を尋ねに差越候ものと、半途にて出合申候。女子失亡仕候事は、其日の

晝の事に候由申、紛無之儀に付渡し遣候。太郎左衛門仕形を陽廣公御聞被遊、殊に感じ思召候は、はやり過たる仕形に候はゞ疎忽成事も可有之所、鎮りたる仕様に候。御感賞の爲とて御衣類の品三端被爲下候。太郎左衛門は今の千秋太郎左衛門曾祖父にて、半左衛門父にて候。此事先年より承及たる事ながら、至極の奇恠と存じ不及筆記候處、此度高山が妾の事に付記し置きぬ。丙辰九月十一日

一、虞翻十二歳の時の語

琥珀不受腐芥。磁石不受曲針。虞翻十二歳の時に云。

一、藤澤長達の重脩菅廟詩並序

湘川軍城之北有寺。曰大願寺。襟谿而帶河。護山八面之峯聳乎西北。肆居萬井之烟。蒺于東南。可謂境內清絶之所也。慶長中石見侯大久保氏之來鎮也。相攸於此。除地。勸建丞相菅公之祠。始置祭田。且脩祭器。命土人奉祀以禱社稷之福。祀典肅如。後守土之官。世加崇敬無敢怠焉。享保壬子之冬災。棟宇樓觀悉成煨燼。衆以神靈代百雉之災。自火其廟矣。蓋加被服焉。廟守者竊慨香火之絶。欲重脩堂宇。奈乏貨財何。雖欲復可得乎。今茲癸丑夏。美雅荻公來知于斯。

乃大發土木。嚴督匠作。至歲之十一月竣功。正殿拜亭輪奐既成四方改觀。嗚呼相公之靈。洋々乎照乎宇宙。黎元浴霖雨之仁。今荻公參廟廊之謨。使盛典再舉不墜。蓋公之誠心。天誘其衷者歟。不肖謏劣。恭賦野詩一律。易溪毛之采亦致區々之誠爾。

祠堂新造最崔嵬。輪奐瑞暉天地開。粉閣絃歌環瑞草。彤墀俎豆對官梅。彩毫深濡金莖露。藻思剌看舟楫材。賴有和羹調鼎手。千秋遺澤滿靈臺。

右菅廟佐渡州建。土人藤澤長達詩並序。鳩巢先生葦簣前二日。書詩後一篇見于前。

一、未嫁の姉を處姉と稱する事
妹嫁して未嫁の姉を處姉と稱す。袁隗妻馬融女。初成禮。隗問之曰。今處姉未適。先行可乎。對曰。妾姊高行殊貌。未遭良匹。不似鄙薄苟然而已。隗默々無以應。事文類聚卷十一

一、丁酉の年夢得の句

丁酉の年十一月二十七日曉夢得の句

民おこり身おこれとや喚子鳥
一、宋の范至能が菊譜序

近年小菊花を愛する事都鄙ともに甚し。此事中華の書にもみえたり。宋人范至能菊譜序云。

吳下老圃。伺春苗尺許時。撥去其顛。數日則岐出兩枝。又撥之。每撥蓋岐。至秋則一幹所出數千百朵。婆娑圍檀如草蓋重籠矣。人力勤土又膏沃。花亦爲之屢變。頃見東陽人家菊圃。多至七十種。

一、白菊の黃菊に變ずる事

新井筑州家白菊の類、年を経て皆黃華に成りし事前篇に記しぬ。此事も亦宋史正志菊譜序にみえたり。云。

品類有數十種。而白菊一二年多有變黃者。余在二水植白菊百餘株。次年盡變爲黃花云々。以黃爲正所以。槩稱黃華也。

一、弑逆の罪

桓譚新論云。男子畢康殺其母。詔焚燒其屍。暴其罪於天下。余上章言。宣帝時公卿朝會。丞相咨曰。聞臯生子。長且食。其母寧然。有賢者應曰。但聞鳥子反哺耳。丞相大慙。君子之於鳥獸。尙爲之諱。况人乎。弑逆の罪、人其罪をあらはさん事を議するの說、前篇に見えたり。宜參考之。